

大内地区に伝わる民話

やさしいひめ山

むかしむかし、山口のまちに、それはそれは美しい娘がいました。ある日のこと、お殿様がその娘をご覧になり、とても気に入り、忘れられなくなってしまった。

お殿様は、娘を連れてくるよう家来を使いに出しましたが、娘は、他に好きな人がいるのか、どうでもお殿様のもとへ出向くことを承知しません。それを聞いたお殿様は、大変腹を立てられました。そしてある晩、家来に娘を無理やりしばって連れてさせ、山の頂上にある古井戸に落とし、毎日数十匹のへびを投げ入れへび責めにしました。

娘は、余りの悲しさに、「私は、美しく生まれたばかりに、こんなつらい目にあいました。後の女の人に、こんな苦しみを二度と受けさせないために、このお山から見える限りの所にはこれからずっと、美人が生まれませんように。」と言い残してもだえ苦しみながら死んでいきました。美しい形をした山の名は、やさしく「姫山」と残っていますが、それからというもの、山口には美人が生まれなくなったということです。



えんこう地蔵

むかしむかし、問田川では、夏になると水遊びに行った子どもが、よくおぼれて亡くなっていたそうです。「これは、きっとえんこう(かっぱ)が引っ張り込んでいるに違いない。いつかこらしめてやろう。」と村の人たちは、口々に言っていました。

ある日のこと、村の人人が川で馬を洗っていると、えんこうが馬のしつぽにぶら下がっており、馬にけられおどろいたえんこうは陸に上がり、がって気絶してしまいました。村の人たちは、手に棒切れや熊手をもって「息子の敵」「弟の敵」とわめきながら、えんこうをたたきつけました。たかれで気づいたえんこうは、「どうか命だけはお助け下さい。これからは、絶対に子どもを引っ張り込んだりしません。これまでに亡くなった子どもたちのために、石のお地蔵さんをつくってください。そのお地蔵さんのお尻がくさらない限り、出でこないことを約束します。」さらに「命を助けて下さるなら、全国のえんこうが人や馬にいたずらをしないよう、木曽川の谷奥にいるえんこうの親分に頼んでみます。」と涙を流して頼むので、やさしい村の人たちは許してやることになりました。それからというもの、問田川をはじめ全國の川から、えんこうのいたずらがなくなったということです。



名を変えた面貌山

おおうちし えいでら うじがみ ひかみさん に がつえ うかりし 大内氏の氏寺・氏神であった氷上山の二月会は、毛利氏の時代になつても特別な扱いを受け盛大に行われていました。童舞のかわりに能狂言が行われており、その能狂言には、藩主の宝物である翁の面を使った能が行われるということで有名でした。

ある年の二月会のとき、この翁の面が空を飛んでいき行方不明になつてしましました。家来たちは大変なさわぎになり、必死に探しましたが見つかりません。

数日後、矢田の村人から「終の延命寺山の松の木に、毎晩不思議な光が見えます。」と代官所に届出があり、探してみると翁の面でした。このときから、この山は面貌山と呼ばれるようになったということです。

しかし、このとき見つかった翁の面はあごがなくなっていました。数年後、家来が山口の古道具屋でこのあご部分を見つけたので、お殿様に申し出たところ、「それはおもしろい。一つ比べてみよう。」とおっしゃり、あごのない翁の面にこのあごを当ててみたところ、カチッと音をたててくつき、もう決して離れることはなかったということです。



御堀の土まんじゅう

むかしむかし、大変欲の深いおばあさんがいました。この日は、ご先祖様の法事でたくさんのおまんじゅうをせっせとこしらえていました。

そこへ、ぼろぼろの服を着たお坊さんが通りかかり「私は、旅のものですが、お腹がすいてしかたがありません。そのまんじゅうを、一つわけていただけませんか。」と頼みましたが、欲張りばあさんは「このまんじゅうは、土でこしらえてあるんだ。あげたくてもあげられないんだ。どいたどいた。」とうそをついて追い返しました。お坊さんは、悲しそうな顔で去っていました。

するとどうでしょう、今の今までほやはやとおいしそうに湯気を立てていたおまんじゅうが、あつという間に硬い石になつてしまいました。おばあさんは、訳がわからないまま怒ってまんじゅうをみんな捨ててしまいました。実は、このお坊さんこそ、修業で全国を歩いておられた弘法大師様だったのです。

不思議なことに、今でも御堀ではまんじゅうのようなたまりが、土の中からコロコロと出てくるということです。



みづが渓のみずち

おおうちし おおうちす おおうちす みほり 大内氏が、大内に住んでいた頃の武勇伝があります。御堀の乗福寺の奥にみづが渓という谷があり、15m以上もあるこわい「みずち」という竜が住んでいたそうです。ここを通る人や馬を引っ張り込んでいたので、村の人たちはたいそう恐れています。このこと耳にした16代大内盛房というお殿様が、200人の優れた家来を選んで、みずち退治を命じましたが、それだけの家来がかつていっても、退治することができませんでした。

時に及んで、息子の弘盛(後の17代)は、武勇に優れた武士で「よし、こうなつたら、わしが退治してやろう。」とみづが渓に出かけていき、みずちを一矢で射止めたということです。そのみずちの下の骨が今も乗福寺に伝わっています。日照り続きで雨乞いをするときには、このあごの骨をまつると、不思議と雨が降るということです。他の寺からも借りに来られていたそうです。

